

2019年1月20日（日）「今日御声を聞いたならば」

マタイ 21:28-32

28 ところで、あなたがたは、どう思いますか。ある人にふたりの息子がいた。その人は兄のところに来て、『きょう、ぶどう園に行っておいでしてくれ』と言った。29 兄は答えて『行きます。お父さん』と言ったが、行かなかった。30 それから、弟のところに来て、同じように言った。ところが、弟は答えて『行きたくありません』と言ったが、あとから悪かったと思って出かけて行った。31 ふたりのうちどちらが、父の願ったとおりにしたのでしょうか。」彼らは言った。「あとの者です。」イエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。取税人や遊女たちのほうが、あなたがたより先に神の国に入っているのです。32 というのは、あなたがたは、ヨハネが義の道を持って来たのに、彼を信じなかった。しかし、取税人や遊女たちは彼を信じたからです。しかもあなたがたは、それを見ながら、あとになって悔いることもせず、彼を信じなかったのです。

【序論】

2019年を迎え、早や三週間ほどが経過しました。年の初めには「一年の計」をお立てになった方もいらっしゃると思います。私自身も毎年幾つかの目標をノートに書き出して、それを繰り返し確認しながら一年を過ごすのですが、それでも年末に振り返ってみると実行できなかったことが少なからずあったことに気づき、残念な思いになるものです。面倒なこと、手間のかかること、必ずしも今すぐやらなくてもよいことは、どうしても後回しになる傾向があります。そして、もしかしたら実行しないまま一生を終えていくものもあるかも知れません。

しかし、私たちの霊的な領域の話になりますと、そうであってはならないでしょう。なぜなら、実行したか否かは、私たちの永遠の行き先を決定するからです。では、私たちは何を実行しなければならないのか。今日は霊的な領域における「実行」について考えてまいりたいと思います。

【本論】

本論 1. 写本上の問題

今日の箇所は、ぶどう園の農夫の二人の息子にまつわる譬話ですが、この箇所を学び

始めてみて、私は大きな翻訳上の違いがあることに気づきました。口語訳や新改訳第三版などでは、第一の息子は「行きます」と答えておきながら行かず、第二の息子は「行きたくない」と答えたが行ったという設定になっています。ところが、新共同訳、新改訳 2017、聖書協会共同訳などでは、第一の息子は「行きたくない」と答えたが行き、第二の息子は「行きます」と答えておきながら行かなかったという設定になっています。これは写本の段階で生じた混乱で、どの写本を採用するかによって翻訳も解釈も変わってきてしまう。「現代の聖書学の最高水準を示すギリシャ語新約聖書テキスト」(Wikipedia)と言われる「ネストレ・アーラント」は、ドイツの聖書学者エベルハルト・ネストレが校訂し、同じくドイツの聖書学者クルト・アーラントが再校訂しました。クルト・アーラントによる校訂第四版では、第一の息子が父の言いつけに従い、第二の息子が従わなかったとなっているのです。

どちらの解釈が正しいかをここで論じることは、テキストの理解に大きな影響を与えるものではありません。譬話のポイントは、「父の心を実行したかどうか」です。一人の息子は口では約束したが実行しなかった。もう一人の息子は口では拒否したが実行した。どちらが父の心に適っているかという問題であります。ちなみに、「兄」「弟」と訳されている言葉は、原文では「第一の者(τῷ πρώτῳ)」と「第二の者(τῷ δευτέρῳ)」で、必ずしもどちらが年上かは分からないのです。その意味で、この箇所を学ぶ上で気をつけたいことは、翻訳上の違いという枝葉に心を奪われることなく、語られている真理に目を向けるということです。

まず、このストーリーがどのような文脈で語られているかを思い起こしましょう。前回学んだ 21:23-27 では「イエスの権威」にまつわる問題が取り上げられ、主イエスはバプテスマのヨハネの権威はどこから来たものかを問い返しました。バプテスマのヨハネが天からの人であるということを認めない「祭司長・長老」に向けて今日の譬は語られているのです。つまり、「祭司長・長老」とは「第一の息子」か「第二の息子」か、いずれであるかを問う譬話なのです。

本論 2. 約束と実行

ところで、あなたがたは、どう思いますか。ある人にふたりの息子がいた。その人は兄のところに来て、『きょう、ぶどう園に行ってお働いてくれ』と言った。兄は答えて『行きます。お父さん』と言ったが、行かなかった。(21:28-29)

この時代、父親の権威は絶対でしたから、ぶどう園での労働を頼まれたら断れるものではありません。「行きます」という返答は当然のものです。しかし、第一の息子はその

ように返事をしておきながら行かなかった。それがどんな理由であれ、約束を果たさなかったところに弁解の余地はありません。一方、第二の息子は正反対の行動を採りました。

それから、弟のところに来て、同じように言った。ところが、弟は答えて『行きたくありません』と言ったが、あとから悪かったと思って出かけて行った。(21:30)

第二の息子は当初「行きたくない」と答えましたが、後から思い直して働きに行きました。本来ならば父の言いつけに従わないという時点で既に悪い息子なのですが、これは主イエスならではの「真理を悟らせるための誇張」です。主イエスが問題としているのは、約束しても実行しないのと、約束はしないが実行するのと、どちらが喜ばれるかということです。答えは明白であり、祭司長・長老たちにもすぐに分かりました。

ふたりのうちどちらが、父の願ったとおりにしたのでしょうか。」彼らは言った。「あとの者です。」(21:31a)

父親の指示を実行することこそが重要であると主イエスは言われます。では、主がここで意図している「父の心」とは何であるか。

イエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。取税人や遊女たちのほうが、あなたがたより先に神の国に入っているのです。というのは、あなたがたは、ヨハネが義の道を持って来たのに、彼を信じなかった。しかし、取税人や遊女たちは彼を信じたからです。しかもあなたがたは、それを見ながら、あとになって悔いることもせず、彼を信じなかったのです。(21:31b-32)

主イエスが求めているのは、悔い改めと信仰です。バプテスマのヨハネは悔い改めのバプテスマを宣べ伝えましたが、それに応えたのは祭司長や長老ではなく、遊女や取税人でした。取税人とは、ユダヤ人から税金を取り立ててローマ帝国に納める「売国奴」と呼ばれていた人々。また遊女はその全存在が汚れていると見られていた人々で、彼女たちは駐屯していたローマ兵と深く結びついていたこともあり、神の民から厳しく排斥されていました。しかし、これら(当時の見方で)社会悪の代表とも言える人々が、真っ先に悔い改めの実を結んだということです。30 節の「あとから悪かったと思って出かけて行った」という表現は、まさに「悔い改め」の意味で使われる言葉であり、彼らは神の国のために罪を捨ててバプテスマを受けたのです。

一方、「行きます」と生返事をした人々は、祭司長・長老・律法学者たちを表しており、彼らは「口ばかり」で、つまり神の戒めの表面だけを行ない、実際にはそれを行っていないことを示しています。神の戒めを守らないとは、神の御心を行なわないこと。自分を義とし、悔い改めないことです。

本論 3. 先に神の国に入るのは誰か

遊女・取税人と比べられること自体、お偉い宗教指導者にとっては心外だったことでしょう。しかし、そればかりではなく、主イエスは神の国に入るのは宗教指導者ではなく、彼らによって断罪され、社会から排斥されてきた遊女・取税人だと言うのです。遊女・取税人は神の戒めを何一つ守らずに生きてきました。今日の譬話では「(ぶどう園に) 行きません」と返答した者とは彼らを表します。最初から神の御心を行なおうという意思もなければ、環境的に不可能でもある。人々から疎まれ、まともな社会生活さえできない自分の人生を呪ったこともあったでしょう。遊女になった人々は、必ずしも好きでその道を選んだのではなく、貧困の末、ほかに選択肢がなく、成り行きのままそのような人生を歩んでいたという人が多かったはずで

す。しかし、バプテスマのヨハネの「悔い改めよ」というメッセージを聞いて、直ちに反応したのは罪を知る彼らでした。反対に、自らの罪を知らない人々（清潔を求めて生きていた人々）は、ヨハネのメッセージを嫌ったのです。「お前のような学問のない奴にそんなことを言われる筋合いはない」「そんなメッセージは聞きたくない」として、ヨハネを神からの人とは認めず、悔い改めなかった。そして、ヨハネを受け入れなかった人々は、ついに主イエスをも排除してしまうのです。

この譬話は私たちに何を語っているのでしょうか。幾つかの読み方ができると思います。第一に、まだキリストを心に迎え入れていない人、信仰を言い表していない人への招きと捉えることができる。「悔い改めて福音を信じなさい」という、ヨハネと主イエスの一貫したメッセージが迫ってくるのです。もしこれまでにそのようなメッセージが一瞬でも自分の心に語られていると感じたことがあったら、その声をシャットアウトしてはいけません。応答の機会はこの人生に多くは与えられていないからです。その声に応えるか否かは、あなたの永遠の問題と関わってくることになるでしょう。

第二の読み方は、既に信仰に入っている人たちへの問いかけです。私たちの信仰生活に悔い改めの実があるかどうか問われてくる。神の御前にへりくだった心があるか。その信仰生活が形ばかりのものになってはいないか。宗教がいつの間にか形骸化し、心に福音がビリビリと響く感覚を失ってはいないか。信仰的に白けた状態は危険です。私たちは入信時、罪を悔い改めて信仰を告白したはずですが、それは一度きりのものではなく、人生の終わりまで継続していく告白でなければなりません。ひとたびへりくだった者は、いよいよへりくだりながら、主イエスに似た者とされ、その人生を終えていくのです。これがキリスト者のゴールであります。

【結論】

靈的な領域における「実行」とは、悔い改めと信仰告白です。それは一回的なものであると同時に、日々求められているものでもあります。一日の終わりには必ず神の御前に出て罪を告白し、救い主イエスの御名を呼び求めたい。「そんなことはもうやっている」と言われますか。いえいえ、この罪の告白すら通り一遍倒のものとなり下がるのが私たち人間ではありませんか。私たちの内には常に「高ぶり」「形骸化」といった罣が潜んでいることを忘れてはなりません。一つ一つの生き方に心を込め、何をするにも主に喜んでいただくために行なう者でありたい。実行を遅らせることなく、御声を聞いたら直ちに行動に移すしなやかな信仰を身につけていきたいと思います。その積み重ねが私たちを確かなゴールへと導いていくことでしょう。

【祈り】

常に私たちの心に語りかけ給う主よ。私たちはその細き御声を聞いているでしょうか。世の雑事がいばらとなり、いつの間にかあなたの声が聞こえなくなっていることはないかと案じます。どうか私たちの心をあなたに向けさせてください。そして、一切の高ぶりを捨て去り、救いが不可欠な存在であることを常に認識させてください。そして、あなたが示される道に直ちに応答していく、しなやかな信仰をお与えください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
如何なる人生を歩んできた者にも、等しく救いのメッセージを語りかけ給う、父なる神の愛。
神の御前にへりくだることを教え、真心から福音に応答せしめ給う、主イエス・キリストの恵み。
今日という日を一期一会の神との出会いの時とさせ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。